亞尔然丁時報

文藝附錄

第五卷
第七號

JULIO
DE
1930

濁つた明眸

1

一四五生

木枯の健康体が紫と赤とに世紀末された電気広告燈を目蓋にぶつかせ高いビルディングの角を吹き捲り加速度して進行する電車にブツ突かつて行く、そして建物の人工的峽谷を白い歯を露出しながら大通へと一直線に突進するのだつた。

道行く人々は唇を青黒く震してた。白い息をはき出す騾馬の臀で馭者の鞭が惨酷に躍つた、いきり立つた馬の蹄から火紅の花が飛散し中の客は外套の襟をかき合せた。

吉田は、今の賣高では経済が許さないつて云ふ薄弱ふ理由に解雇されて目的もふく出武する古川の青白い顔に唇を向けた。

――暗流の渦巻いてる世界だね。

すると古川は嘲る様ふインテリゲンチア特産の苦笑を浮べながら冷静に云つた。

――君も今にそれに合化されるよ。

そして没落階級の代表的存在としての君を見出すかも知れふい。

然し易い――その反面の涙にもろいと云ふ弱点を持つ吉田を悉知してゐる古川は、我事よりも無自覚ふ彼と彼の周囲の覚醒を見ずして食はんが為に何処へか去らねばならないのを悲しむのだつた。

吉田はメ市在住の同胞社会に於ける社会主義者としての――新刊書類購讀者を斯く命名する――良風？ある故に――存在を知つてた。だが情実と感情に捕れて解メするメ・メのメ・メにはマルキストならぬ吉田の正義感も震へた。

でも古川は云つた。

「忍従仕給へ」って……

ステーションは又人生のステーションでもだつた。

其処には雑多ふ人間が溢れて居た。

悪人を待ち送るであらう男女、

ポケットを覗ふ掏盗兒、前のバーから流れて来るラヂオと口笛で合奏する酔漢。

イカモノ旅館の客呼人は田舎の聖者を物色し失業者は隅っこのバンコに居眠り、

不良青年は田舎娘を誘惑し様として居た。

カフエ・モンテカロルの扉がパッと口を開いて吉田を吸呑むと淫蕩的ふ風景が明く廻轉した。

眞鍮具は電燈の反射を受けて哄笑し柳の酒壜は二三種類で一列横隊だ。

床には紙屑と何打かの小型タオルとハナカミとがあつた。

つきぬなしに出入する人々の全身的に発散する煙草の作る煙幕、その動揺、

猥褻ふ饒舌の飛散。

ストウヴから立昇る温気と、女達の乱用する流眗とから構成されたその躰臭、

それに自動ピアノの騒音が君臨してた。

アマリアは毎晩此のカフエに来てパンを得んとする一人だつた。今晩も彼女は或デスクで小型の鏡と相談して粉装してゐた。

彼女の仕事友達はそれ〴〵の姿態で気のありそうな男達に秋波を流し牛の様ふ臀肉ガセンスアールに迴轉するのだつた。そして掴んだ男を離すまいとしていた。

――金を持つてない――と云ふ習慣的に繰り返へすらしい東洋人のアクセントガアマリアの聽覚をかすめて行つた。

アマリアには東洋人ガ若いのガ老いたのガ、其処に出入する東洋人ガ全じ様に見へた。年も容貌も其の東洋人は黄色い顔の細い黒い眼ガ何んとなくおど〳〵と神秘を探してた。特に童顔に見えるその微笑ガ少しく彼女の性的好奇心を煽つた。そして刺戟的ふ猫の様ふ目ざしで男の唇を眺めるのだつた。

白つぽい電燈ガ春画に満ちた部屋に生きてゐた。吉田は寝台の端に腰ガけて黙々と衣服と格闘してた。アマリアはまだ床の中に居て吉田ガ逆ふ順序での着服を不思議ふ現状として眺めた。やガて彼は最後に靴下と靴を穿き終つた。そして財布を一番下の何処ゥらの奇術に出現さした――と彼女のだるい頭脳には素速い営利心ガ働いて彼の心を埋へるべく側にあつた机上の寫眞を贈呈するのだつた。

悪人へと筆に署名して。

東洋的地名のカフエ店Xにはアマリアに全じく見える人々ガ働いてた。

其処には猜疑と偏狭と嫉妬と諂と……とガ大地を踏みつける力もない青白い顔の技巧的な笑の中に隠蔽されて居た。

四時からの爭乱に供へる爲めのカン高いカ、ヤを奢はせる人々のそいての他には三、四の群となつて極限された自惚の話題ガあつた。

淫賣と競馬とキネラと……

輪くして彼等は給仕の注文する黄色い声を合図かの様に客の政治問題とフートボールとダードに圧迫されて軍隊的に活動を開始するのだつた。

刺戟的ふ目、暖いベット、白い腕、ふくれ下つた乳房、ふくよかな臀肉、白蛇の様ふ裸躰、悩しい抱擁、そしてヤ美ふ官能の陶酔――吉田の頭脳にはそれ等ガ未だにこびりついて煩悩された神経は理性への反逆を今日の此の爭乱の中迄も続けてるのだ。

――淫賣じやないか。

吉田はそうつぶやくと、其処にはXXの眼ガ光つてた。

――七・二八――

"詩"

空の青色

比嘉廉永

薔薇

空想に耽けて
忘れてゐる……
と、突然
これらの大きな薔薇の花は
お前だ、
僕の部屋を、
僕の周囲を歩るく
幾つかのフレッシュな
裸体のお前だ

空の青色

お前はお前に似て
お前に似てゐない
丁度
空の青色のやうに……

自然よ

あ、自然よ
お前の大きな裸体を
子供ゞ石ころを起こすやうに
吸き起して
その下に棲む
無数の小さな
お前の「秘奥」を探しあてるものは
唯れだらふ！

夜の街

夜の街は
電気広告の
一斉射撃だ
性慾の戰士ゞ
慶しく
過ぎていつた—

待つ

蘇南

ヴェノスの街々ゞ
うす暗くなると
私ゞ帰途につくのです

外套に頬を埋めて
電車を待つてると
老も若きも寄つて来ます
年寄から先に
子供や娘を乗せると
私は又次の電車を待つのです
色どつた電燈が
私の心をそゝのかすので
ついカフヱー一杯になるのです

家に帰るにも
待つ間のながさに
カフヱの味が出るのです。

秋嶺

血・・・・

若い女の
白い頬に血が
唇が、手が
がすかに震へてる
おゝ、なんと痛々しい姿だ

秋嶺

恋！

恋よ恋

何処を彷徨ふ？
吾が胸を離れて

恋よ恋
吾が誓ふり捨て
情け知らずや恋

恋よ恋
涙が止めどなく
頑丈な吾が頬に流る。

"短歌"

病みて　無縁居士

事成らで病みてさすらう黠国の
枯野に結ぶ故郷の夢。

独り病む我が枕辺の虫の音も
いつしか絶えて木枯の鳴る。

幾度か心さわがす夜半の夢
老ひますます父母の如何に在すや。

恋も名も今日の已れに何かせん
たゞひたすらに生きんとぞ思ふ。

霜枯れて流れにもまる水草の
何処の岸にかはねぬ止めん。

病床にて　七・一八

哭き笑ひ……

富見男

アベニーダ・デ・マーヨのイルミネーションの下を、人波にもまれて私は蠢いてゐた。

今日は七月九日の夜だ。

その昔トクマンで亜国独立を宣言した人々の徳をたたへて、心からこの祝福された日を祝つてゐる人がこの群集の中にはたして幾人あるだらうか？

そんな事を考へてみる余裕を持つハポネスだ。

誰れも居るもんか、今宵は男と女に與へられた絶好の逢ひ引時なんだもの……

「ポル・ディオス」

一杯のマンハッタンが私を哭き笑ひさせた。

すると女の体臭が鼻先でたまらなくむせ返つて、ピッタリと海水着の様に曲線を画き出す女の外套の流行が、私の心を引つかきむしる。

薄絹をすかして女の膣が私に蠱惑的な刺戟を與へると自分にもわからないなやましさだ。

「ワーッ」突然群集がどよめく。

女が男の腕にかじりついて行進曲だ。

と、街角から「クリティカ、キンタ……」と叫ぶよぼ〳〵な爺さんの断末魔の奇声が歓楽の夜空に氷結つた。

「あゝ、この爺さんだ、この爺さんだ、この爺さんこそ今日のよろこばしい日を心から祝つてゐる人なんだ……」

かへりみて呉れる人もないこの爺さんの、それでも時たまもらすうれしそうな微笑がたまらなく私をメランコリックにさせた。

一串を握らせた私は、あつけにとられた爺さんを後に人波をかきわけた。

鼻先きで再び女の体臭がむせかへる。

星が寂しく流れた。

× × ×

知らず〳〵の中に人波が私をプラサ・マーヨまで引きづつて来ると、私の足はわけもなく海岸通りの酒場に向けられる。

酒と女に男の弱点を抱擁してゐる海岸通りのバー。ここは夜のブエノスを代表する不夜城だ。

白粉と口唇と安香水に色彩られた夜の女の狂態がジャズと紫煙にむせかへつた男にジョニウォーカーの清涼剤をあほらせて情慾をそゝる。

畜生！肉にうえた善良な船員共を喰込んで行く賣女が行きがけの駄賃に舌を出しやがつた。

だが男つてなぜ女にかゝるとこんなに意気地がないんだらう？……奮慨してゐる自分自身がこうした意気地のない男に求めてならうと淫蕩の巷に来てゐるのを見た時、壁にかゝつてゐる鏡をたたきこわしてやりたい様な気がして悲しい。

夜が更けるに随つて女共の狂態はどうでも男を引きつけずには置かない。

男共はほゝえみの中にそれを待ち望んでゐる。

わけてもエストランヘーロの我々にはどん底に生きる女が送るウインクにわけもなく感電してしまうのだつた。

「気をつけろ〳〵」誰かが叫んでゐる。

「誰だい余計な留めだてをするのは……」
酒が私の心にレヴォルシオンを起すと
「あゝ・お母さんの声だ……」
どこかで私に叫んでゐるその声こそ、故郷のそまやで甘つたるい乳房を私にくわへさせながら女の為に妻子を捨て、去つた父の帰へりを待ちわびて、涙ながらにきかされたお母さんの声に相異ない。
「お母さん許して下さい」……やつぱり〳〵私はお父さんの子なんです……」

× × ×

ホテルの一室に眼を覚ました私が女の居ないのに始めて気がつくと、ベンターナをもれるにぶい冬の太陽が苦笑してゐた。
ゆうべが九日とすると、今日は七月十日だ。一杯喰はされたかな？と云ふむしやくしや腹をやつとおさへてベッドの上に起き直つた私の枕元に思ひがけない一通の手紙がなにかしら私の好奇心をそゝらせた。
二日酔ひがひどく私を神経過敏にさせて、封を切るのがもどかしい。
「フミオさん！貴男はたしかにそう云ふお名前の方ですわね、きつとフミオさんに違ひない。妾は昨夜あのバーで一目貴男を見た時そう感じましたけれど、貴男はもう妾をお忘れになつてゐたらしい。二年前にバラックスの長屋でマヌエルを可愛がつて下さつた方でせう、かう云つたらきつと貴男は思ひ出して下さるでせう。
妾はマヌエルの母なんです。マヌエルの母がこんな生活を？そうおつしやるのは御もつともですワ。でも、それがうそとは云へない現在の妾なのです……。
貴男があの長屋を引つこしてから間もなくでした、妾とマヌエルは唯一人たよりにしてゐた亭主に捨てられてしまひました。妾の愛がたりなかつたのか、亭主は街の女と一緒に姿を消してしまひました。捨てられた妻と子……現在の妾の生活はこの時から始まりました。
妾は亭主を憎みました。そして世の中の男に対しての復讐を誓ひました。そうです妾は今までに幾百人と云ふ男を妾の唯一の肉体でだましてやりましたワ。身も心もね……。だつてそれより他に女として裏切者の男達への復讐の道がなかつたんですもの……。今の今まで貴男をさへだまそうと思つてゐた妾です。だけど妾にだつて良心が有りますワ。妾にだつて純情はあるつもりです。猛獣だつて恩を受けた方にはかみつけません。フミオさん女つてどうしてこんなに弱いものなのでせう……。貴男の可愛がつて下さつたラウルも死にました。妾の唯一人の味方だつたマヌエルを愛して下さつたフミオさん！妾は貴男を愛してそのお礼が申し上げたい、でも面と貴男に向つてそれを云ひ切る元気のない今の私は余りにも汚れて居りますワ。
この手紙を読んだ貴男のお驚き……妾にはたへられない、もつと書きたい、もつとくわしくお話しがしたい。然し貴男の目覚める事を妾は恐れます。幸ひ貴男はよつてねていらつしやいます。妾は影ながら御礼申し上げます。そして昨夜戴いたお金と部屋代は同封致してます。やがて間もなく夜も明けます。ではお別れ致します。どうか御躰を御大切に……。そしてもう再びこうした場所へ出入りしない事を

書って下さい……　淪落の女より

泣き乍ら書いたのだらう便箋の所々に残る涙のあとが私に昔の記憶を呼び起させた。あの長屋に居た時分、よく可愛がってやったマヌエルの若い母親が、今ではむしばんだ淫をひさいで生きてゐる……可弱い女のすゝりなきが耳もとにこびりついて木枯が寒い。
それにしてもただれ切った肉をもとでに暗から暗へ男から男へと一夜の快楽を求めて歩く女にも純情があるかしら？　そうだ善良な假面をかぶって常に弱者をいぢめてゐる奴等の黄金の泉によりも泥中にこそかへってかうした美しい蓮の花は咲いてゐるのだ、どん底にのたうつ人間の皮を一皮むけば皆んな善人なのだ、その善良な人々を世の中の偽善者が悪人にしてしまうのだ。
「お母さん！」
外に出た私は故郷のそまやに私の帰へりを待ちわびてゐる母を思った。
お母さんの過去にもしもマヌエルの母親の様な事はなかったゞらうか？……断末魔の悲鳴をあげて新聞を賣ってゐた昨夜の爺さんが私のもしや現在の父の生活……馬鹿な……街路につばをはきかけた私は煙草に火をつけるとオフィスへ急いだ。
ラッシュ・アハーのフロリーダ街に南風がパーッと吹いて娘ッ子が前をかき合せると「ラ・ナシオン」などなる意勢のいゝ新聞賣子の喚笑が涙を昇天させました。

"詩"

寒夜

蘇帝

人通りがまれで
静かに更けた街だ
歩む靴音が空に飛ぶと
後に気が滅入ってゾッとする。

ピィ　ピー
巡公の呼笛が
馬鹿に反響する
オー寒い、おどかすなよ、

黒猫が闇から闇へ
スーッと横切ると
畜生！
えんぎでもねェ野郎だ。

オ、寒い
外套の襟に顔をうずめて
すたすた帰途につくと
自動車が前方に走りすぎる。

＃
＃
＃
＃